ハ/ガ使用の計量的研究 —有無・量的大小の述語の場合—

A Statistical Analysis of Uses of *wa* and *ga*: Cases with Predicates of Existence/Non-existence and Largeness/Smallness of Quantity

服部 匡（同志社女子大学表象文化学部）
Tadasu Hattori (Doshisha Women's College of Liberal Arts)

要旨

主文での「X {ハ/ガ} P」で、ハとガのどちらが用いられるかを、新聞記事データを用いて計量的に調査する。述語 P としては、「ある / ない」「多い / 少ない」「大きい / 小さい」「強い / 弱い」「高い/低い」の 5 組を取り上げ、各組の両述語での、名詞類 X 別の主題化率 (= ハの用例数 / (ハの用例数+ガの用例数)) の関係を分析する。一般的な傾向としては、大部分の X に対して、各組の前者の述語（「ある」および大値形容詞）の方が、後者の述語（「ない」および小値形容詞）に比べて主題化率が低いのであるが、「高い / 低い」に関してはかなりの例外がある。先行研究を踏まえ、上記の事実への解釈を与えた。

1. はじめに

主題を表すハの働きやそれを含む文の性質については、松下（1930)、久野（1973）をはじめ、多くの研究が過去に公刊されている。また、題目を持つ文と対比して、中心的対象がガで表示される文の性質を問題にする研究も上記のものを含めて数多い。

有無の述語「ある」「ない」の文で、対象を表す名詞句の表示について、次のような事実が知られている[1]。例えば、ある公園で発話するとして、(1a)－(2b) のうち、肯定文で名詞句を主題化した(1b)や、否定文で名詞句を主題化しない（2a）の使用状況は限定されているように感じられる。例えば、(1b) は他の木と対比する状況など、(2a) はクヌギの木があることを期待していた状況などで使用できる。

(1a)　クヌギの木がある
(1b)　クヌギの木はある　(使用状況が限定的)

(2a)　クヌギの木がない　(使用状況が限定的)
(2b)　クヌギの木はない

また、「多い」「少ない」を述語とする文でもある程度上と同様なことが成り立ち[2]、(3b) や（4a）の使用状況は限定されているように思われる（服部 2002)。

(3a)　クヌギの木が多い。
(3b)　クヌギの木は多い。　(使用状況が限定的)

1　存在文におけるハと肯否定の関係については堀口（1995)、丹羽（2006）を、より広いタイプの文でのガと肯否定の関係については三上（1963)、Kuroda (1965)、仁田（1986）などを参照。

2　「ある/ない」の関係と「多い/少ない」の関係が完全に平行するわけではないが、その点は別に論じる。

(4a)　クヌギの木が少ない。(使用状況が限定的)

(4b)　クヌギの木は少ない。

もっとも、この種の、内省に基づく議論は、特定の名詞句と想起しやすい状況の組合せに基づく観察からの一般化になりがちである。実際、寺村（1988）は、(2a) のパターンに当たる「時間がありません」という文が自然に用いられることを指摘している。「時間はありません」とはあまり言わないように思われる。

そこで、有無(存否)や多寡の文での様々な名詞句に対するガとハの選択、つまり主題化の有無を統計的に調査することが望まれる。本稿では、「ある / ない」、「多い / 少ない」の他に、「大きい / 小さい」、「強い / 弱い」、「高い / 低い」の 3 組の形容詞も含めた統計調査と分析を行う。それらの 3 組は極性反義対（polar antonym）を構成し、また、「可能性」などの多くの名詞(命題や対象の尺度的属性を表すもの）に対する量的述語となることがある点で「多い/少ない」と共通点を有している[3]。

データのサイズの大きさを重視し、新聞記事[4]（テキストとして約 8GB）をコーパスとして使用する。各新聞記事データに MeCab (0.994) と電子辞書 UniDic (1.3.12) による形態素(短単位)　解析を施し、 (5) に当たる用例を調査対象として抽出した。

(5) 名詞類 ＋ {が/は} ＋ 述語 ＋ 。　(＋の箇所に他要素は介在しない)

名詞類とは名詞･名詞性接尾辞の短単位要素 (書字出現形) [5]である。そのうち例えば「性」は実際には「可能性」「重要性」などの末尾要素である場合もある。また、「よう」「つもり」のような形式的な要素も排除しない。述語は終止形に限る。末尾の句点により当該の例は主文に限られる (ガの場合、いわゆる二重主語文の一部になっているもの、所有文と分析されることのあるものなども含む)。

分析で用いる用語を定義しておく。

(6)　主題化率　＝“X は P”の用例数　/　(“X が P”の用例数 +“X は P”の用例数)

以下、それぞれの述語に対して、名詞類別の主題化率を求め、反義述語の組により二次元にして表示する。その際は、どちらの述語に対しても (ガとハ合わせて) 10 回以上の用例のある名詞類を選ぶ。該当する名詞類が多い場合は、用例数が上位 50 の要素のみを示す。

もちろん、“X__P”でガとハのどちらが選ばれるかは状況（を踏まえた話者の意図）によって決まるが、状況という変数を直接に調査に取り入れることは、コーパス調査では現実的にできない。しかし X によってよく用いられる状況群の相違があり、それはある程度、用例分布に反映していると仮定する。

ハには対比性の有無、ガにはいわゆる総記性の有無などの点で異なるものがあるが、そうした区別は行わない。

---

[3]　第一点に関しては「長い / 短い」なども、また両方の点に関して「濃い / 薄い」なども同じであるが、それらは用例数が少ないため扱わない。

[4]　毎日新聞（1999-2005 年)、読売新聞（1987-92 年、2000-08 年、2010-13 年)、朝日新聞（1988-1998 年)の記事データ。各新聞社の許諾を得て研究用に利用している。

[5]　同一形式の意味用法による区別は行っておらず異表記のまとめも行っていない。

2.　主題化率の分布

まず、「ある」「ない」に関する主題化率の分布を図１に示す。

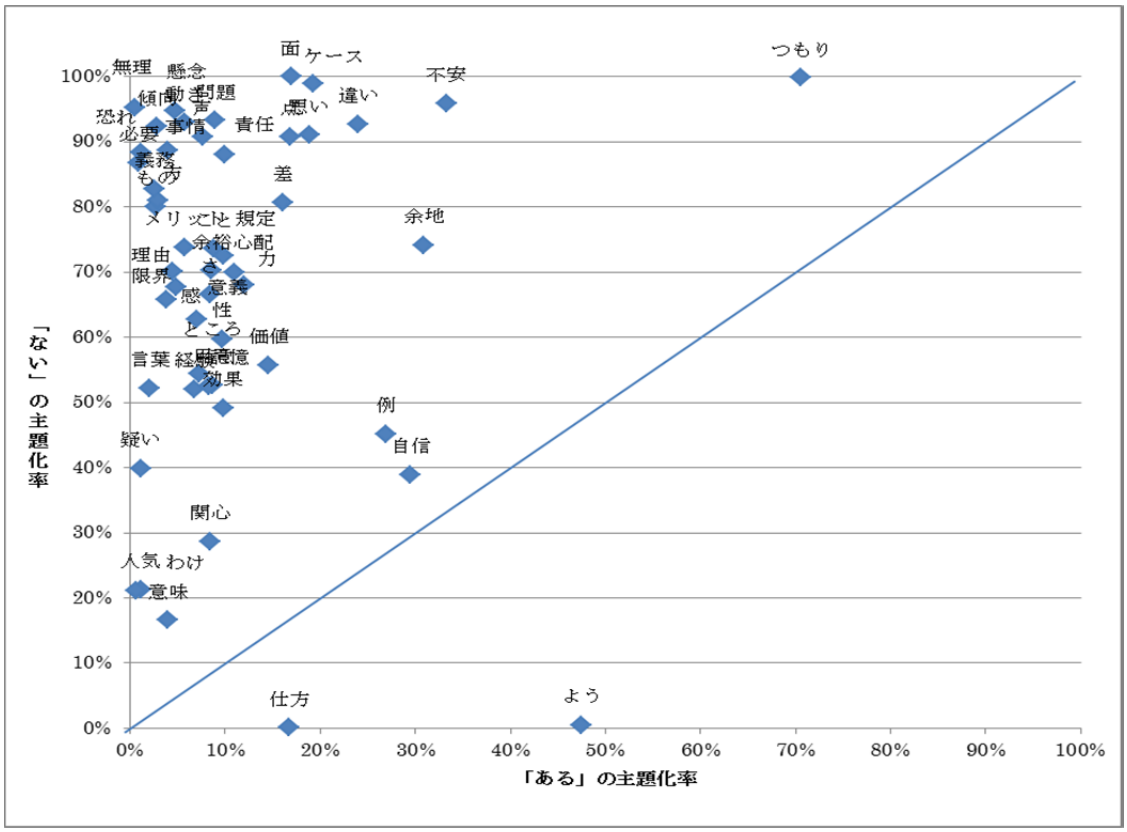

図１　「X__ある」と「X__ある」での主題化率の分布

図に登場する名詞的要素には、「問題」「ケース」など、可算的に用いられるものもあるが、「差」「自信」「関心」「恐れ」など、あまり可算的に用いられないものもある。

図上に示した対角線より上の領域に位置する要素では、「ない」での主題化率が「ある」での主題化率よりも高い。実際には、ほとんどの要素がその領域に位置している。(1)-(4)に示した感覚と矛盾しないことになる。

上記の傾向に、かなり単純化した説明を与えれば次のようになる。たとえて言えば、白紙の上に「X が存在する」絵を描くことは容易であるが「X が存在しない」絵を描くことは困難である[6]。「X が存在する」状態をいったん想定してはじめてそれと X だけの差のある絵を描くことができる。「X がない」のような文は新情報として提示されにくい。一方「X は {ある/ない}」のような文は、X があるかないかをあらかじめ問題として設定した上で「ある/ない」と認定する文であり (丹羽 2006)、不存在を表すのに用いられやすいと思われる。

全体的な傾向に反して「ある」と「ない」での主題化率が比較的近い要素に「自信・意味」などがある。これらは「X がある・ない」で、主体の性質を表している。

ちなみに、用例数が少ないため図にはあがっていないが、寺村氏が問題にした「時間」では、「ある」の主題化率が 31% (用例数 716)、「ない」の主題化率が 34% (用例数 1,018)

6　このたとえは、野矢(2002)を参考にした。

と両者同様に低く、たしかに特徴的な使用傾向を示す要素であると言える。

次に「多い」「少ない」での主題化率の分布を図２に示す。

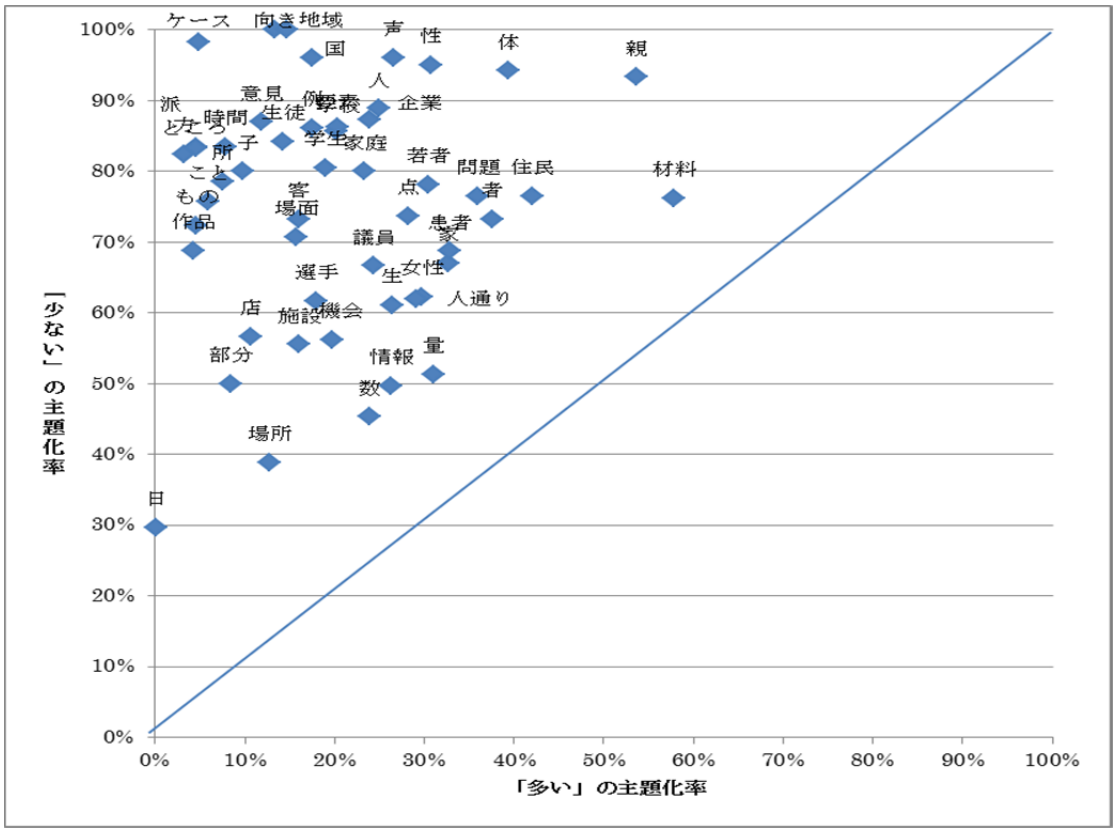

図２　「X__多い」と「X__少ない」の主題化率の関係

登場する名詞類は「ケース」「企業」など可算的な用いられ方をするものが多いが、「数」「量」「(～) 性」など、あまり可算的には用いられないものも一部ある。すべての名詞類に関して「少ない」での主題化率が「多い」での主題化率を上回ることが分かる。

上記の傾向におおまかな説明を与えると次のようになる。いわば、何も存在しない白紙の状態を心理的基盤としても「X が多く存在している」状態を把握することができるが、「X が少ない量しか存在しない」(このように否定文に言い換えられること自体注目される (服部　2002) ことは、X がある程度の量存在している状態の想定を基盤としてしか把握できない。一方「X は｛多い/少ない｝」では、X の多寡があらかじめ問題として設定される。

図 1 と異なる点は、図 1 では「ある」での主題化率は 0%から 10%の間に集中しているが、図 2 では「多い」での主題化率は、10%から 30%の間にあることが多いことである。何かの不存在と対比して存在を述べることはあまりないが、何かの多寡を問題にした上で何かの多さを述べることはそれよりはよくあるということであろうか。

例外的に「多い」と「少ない」での主題化率の近い語に「数」「量」などがあるが、この 2 語は数量そのものを表す名詞であり、「｛数/量｝が多い」は単なる「多い」と意味が近い。

次に、「大きい」「小さい」での主題化率の分布を図３に示す。

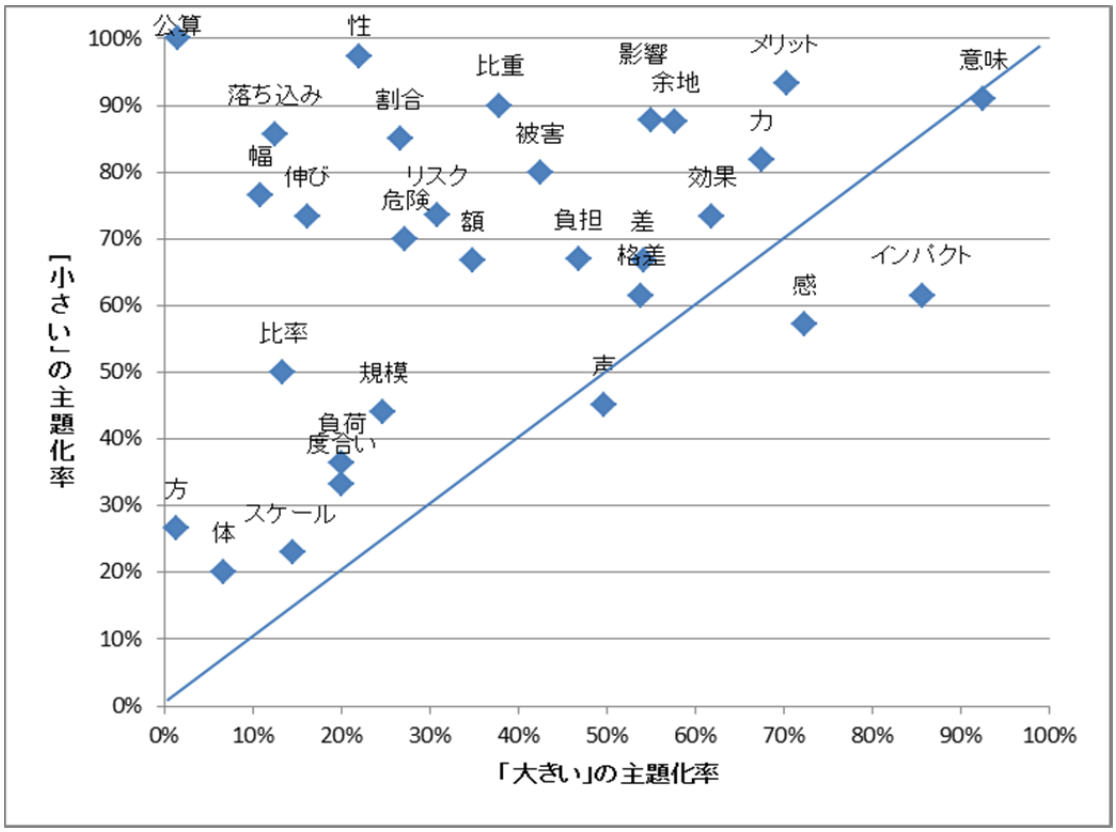

図３　「X__大きい」と「X__小さい」の主題化率の関係

登場する要素の多くは、命題や対象の持つ尺度的属性とみなしうるものを表す不飽和名詞である。例えば、「公算」はあることが実現することの公算であり、「幅」はある物体の幅である。

ここでもやはり、「小さい」での主題化率が「大きい」での主題化率を上回る要素がほとんどで、例外は「意味」「感」「インパクト」「声」の 4 要素のみである（「感」は「存在感」「抵抗感」「期待感」などを構成するものを含む）。中でも「公算」では、「大きい」の主題化率がほぼ 0%、「小さい」の主題化率がほぼ 100%と極端である。ただし、図 2 の「多い」の場合とは異なって、「大きい」での主題化率が 0%から 100%近くにまで幅広く分散していることがこの語対の特徴である。

何かの属性の値が大きいことは、小さいことよりも新情報として提示されやすいということは、ある程度言えそうである。

続いて、「強い」「弱い」、「高い」「低い」での主題化率の分布を図4・5に示す。

図４「強い」「弱い」では、「強い」での主題化率を「弱い」での主題化率が上回る要素が大部分であることは図１－３と変わらないが、その上回りの幅が概して小さい点に特徴がある。“X が弱い”は、多くの場合ネガティブな意味合い（十分に強くない）を持つため期待に反する新情報になり易いのかもしれない。「基盤」「支持」「性」「面」は両述語の主題化率がほぼ等しい。

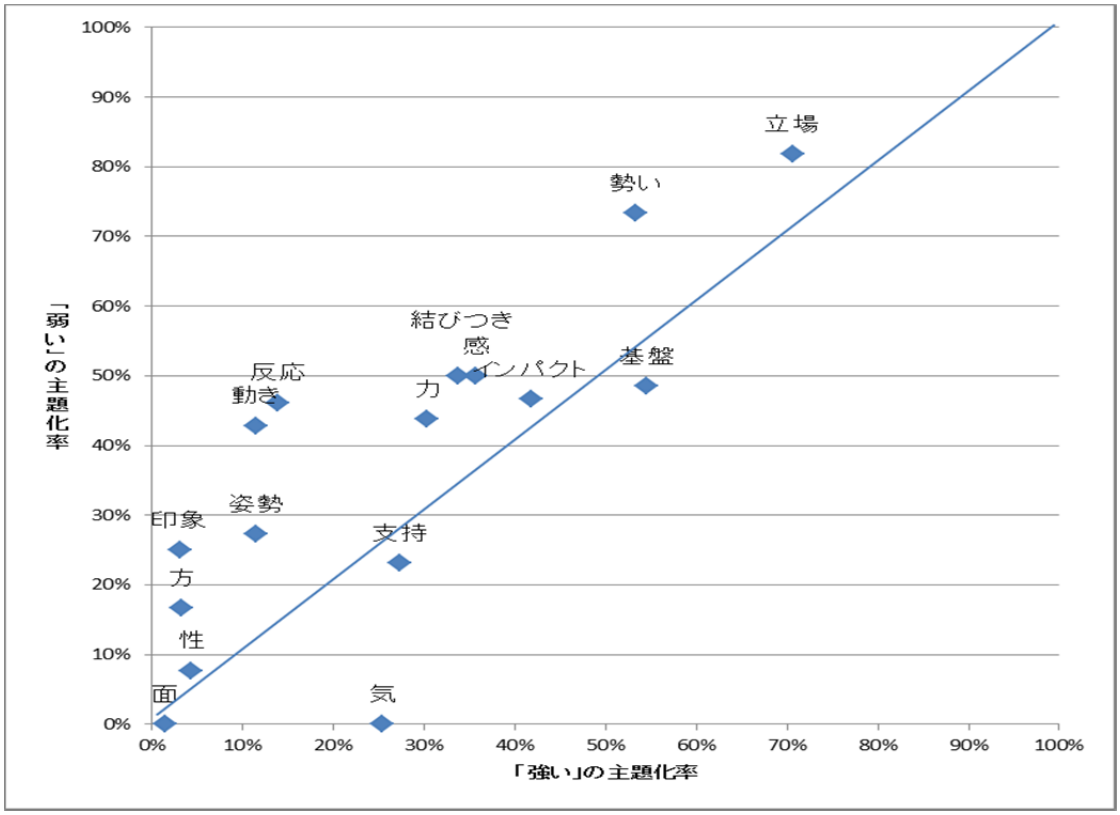

図４　「X__強い」と「X__弱い」の主題化率の関係

図５「高い」「低い」では、出現要素の多くは、やはり、対象や命題の尺度的属性と見なしうる不飽和名詞である。「確率」「比率」「割合」「濃度」「数値」など、数的な値を取るものも多い。

図５の分布は、図４に似ているものの、次の 2 点は異なる 。まず、「高い」での主題化率が「低い」での主題化率を明確に下回る要素が 8 要素あり、また、「高い」と「低い」の主題化率がほぼ等しい要素が 5 要素ある。この形容詞対は、上向き・下向きの方向性と結びつき、質や価値の大きさ/小ささを表すことがある（西尾 1972）こと、量というより段階を言うことがあることと関連する可能性がある。

特に、「性」（可能性、危険性、など）では、「高い」の主題化率の上回りが顕著である。この語は、多くの形容詞対と共起することが知られている（服部 2011）。

なお一部の名詞では、「安い」との関連を考慮すべきである。

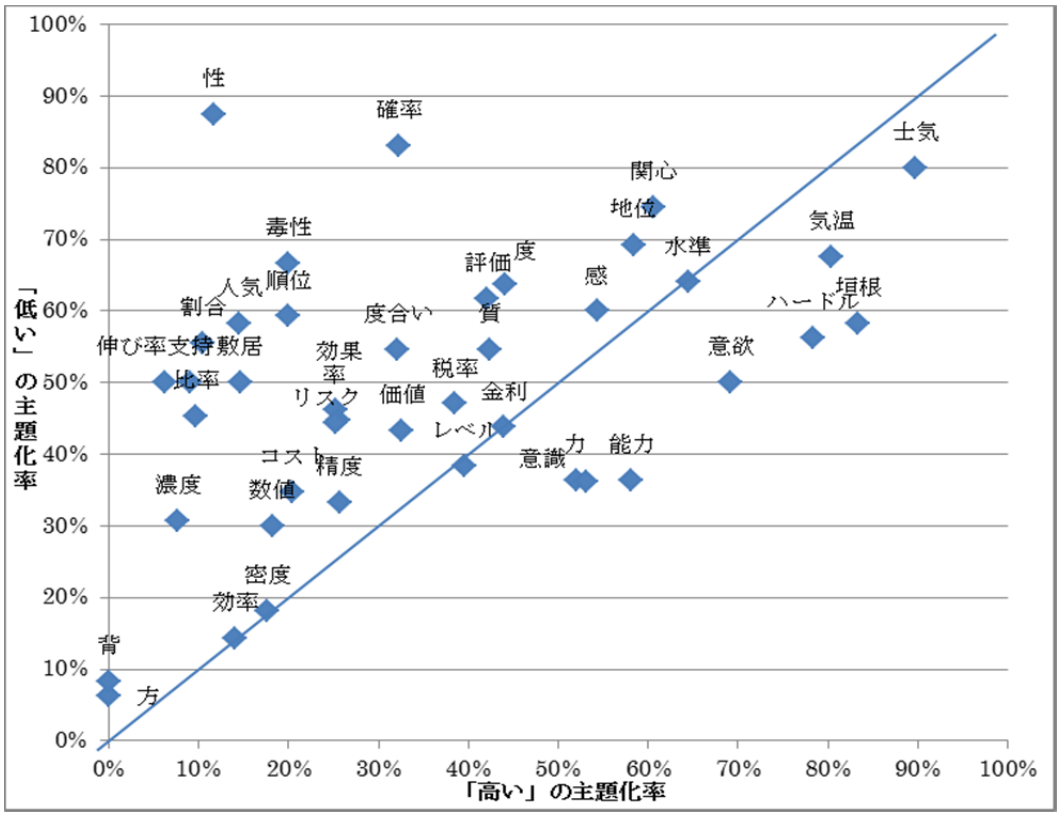

図５　「X__高い」と「X__低い」の主題化率の関係

3.　まとめ

有無の述語および、反義形容詞対を述語とする文で、ガ格が主題化される割合を名詞類別に求め、両述語での値の関係を観察した。およそ、「ある」および大値の形容詞では「ない」および小値の形容詞よりも主題化の割合が低いと言えるが、「高い」「低い」などでは例外もあり、また、「ある」や大値の形容詞での主題化率の分布には述語による相違が見られた。述語別の全体的分布には一応の解釈を与えたものの、個々の名詞類の使用傾向の相違がその名詞類のどのような性質と関連するのかは十分説明できていない。名詞類をグループ化するなどの方法を用いて解釈を試みることが今後の課題である。また、他形容詞等の場合との比較も興味ある問題である。

付　記

本研究は、学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）「大規模通時コーパスを用いた発見的研究方法の開拓」、課題番号 26370516）および、国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」による研究成果である。

文　献

久野暲 (1973)　『日本文法研究』 大修館書店.
西尾寅也 (1972)　『形容詞の意味用法の記述的研究』　秀英出版.
丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』 和泉書院.
野矢茂樹(2002) 『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』 哲学書房.
服部匡 (2002) 「多寡を表す述語 の特性について―肯定/否定関係との平行性を中心に」 玉

村文郎編 『日本語学と言語学』.
服部匡 (2004) 「小さな量を表わす表現の意味的性質について」 『言語研究』 124 号.
服部匡 (2011) 「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係—通時的研究—」 『言語研究』 140 号.
堀口和吉 (1995) 『～は～のはなし』 ひつじ書房.
松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館.
三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版.
寺村秀夫（1988） 「文法随筆—思い出す学生たち」 『月刊日本語』1 巻 1 号. （『寺村秀夫論文集』 1993 に再録されたものによる）
仁田義雄（1986） 「現象描写文をめぐって」 『日本語学』 5 巻 2 号.
Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Garland.